

# 日本映画学会会報

第66号 (2022年7月28日)

The Japan Society for Cinema Studies (JSCS) Newsletter

発行・編集 日本映画学会 (会長 吉村 いづみ) / 編集長 宗 洋

事務局 北海学園大学人文学部 大石和久研究室内 〒062-8605 札幌市豊平区旭町 4-1-40

事務局メールアドレス [japansocietyforcinemastudies@yahoo.co.jp](mailto:japansocietyforcinemastudies@yahoo.co.jp)

学会公式サイト <http://jscs.h.kyoto-u.ac.jp/> 学会公式ブログ <http://jscs.exblog.jp/>

## 目次

視点 2012年以降の英語圏にみる日本映画研究——論文集を中心に 久保 豊 2

書評 堀潤之・木原圭翔編『映画論の冒険者たち』 井上 博之 9

新入会員自己紹介 日本映画における中国人の表象とステレオタイプ / 北海道のフィルムツーリズム研究 崔 鵬 13

出版紹介 16

新入会員紹介 16

## ● 視点

### 2012 年以降の英語圏にみる日本映画研究——論文集を中心に

久保 豊（金沢大学准教授）

近年の英語圏にみる日本映画研究の動向をまとめる作業は容易ではなかった。そもそも「日本映画」とは何を指し、何を含み、何を含まないのか、従来の日本映画研究でもしばしば探究されてきた問いは、本稿執筆に向けた調査過程で私を繰り返し悩ませた。同時に、良かったことも当然ある。Japanese cinema を軸に、作家、アーカイブ、スター、ジェンダー、セクシュアリティ、身体、障害、人種、民族、ポルノグラフィ、ホラー、戦後、フクシマといったさまざまなキーワードを学術データベースや著名な大学出版のホームページへ打ち込むたびに表示された新しい論文や学術書の面白そうなタイトルの数々に胸を躍らせることができた（だけでなく、すでに高く聳える積読の山の影に何度も震えた）。しかし、このようにまだ知らぬ豊潤な視点を整理するには、何かしらの戦略が求められる。そこで本稿では、2012 年から 2022 年までに出版された論文集などを対象に、英語圏において日本映画研究がどのような発展を見せてきたかを提示したい。スター研究や産業史など、日本映画研究の各分野において優先して読まれるべきものは、学術的な対話を通じて次第に選定されていくであろう。それゆえに本稿の目的は、これらの新しい研究の中から日本映画研究の新しい必読書を導き出すことではない。むしろ、本稿が「視点」と題されているように、「ホームムービー」、「アーカイブ」、「クィア」といった私自身の関心を軸に偏向して書いていくことを予め断っておく。

2012 年からの 10 年間に於いて英語圏の日本映画研究で起こった点で特筆すべきは、充実した論文集の出版が 2020 年から相次いだことである。これから日本映画研究に挑む学部生や大学院生にとって、*The Oxford Handbook of Japanese Cinema*（2013）を皮切りに、*The Japanese Cinema Book*（2020）、*Routledge Handbook of Japanese Cinema*（2021）、*A Companion to Japanese Cinema*（2022）は、グローバル化とデジタル化がますます進んだ 2010 年代に発展・蓄積されてきた日本映画に関する対話の結実を学ぶために欠かせない論集になっている。宮尾大輔編集の *The Oxford Handbook of Japanese Cinema* に関してはすでに菅野優香（2017）による緻密な日本語レビューがあるため、他の 3 冊を見ていこう。

藤木秀朗とアラスデア・フィリップスが編集した *The Japanese Cinema Book* は「Theories and Approaches」（6 本）、「Institutions and Industry」（9 本）、「Film Style」（4 本）、「Genre」（7 本）、「Time and Spaces of Representation」（4 本）、「Social Contexts」（5 本）、「Flows and Interactions」（5 本）という 7 つのパート（合

計 40 本) に分かれている。3 冊の論集の中で最も収録論文数が多い点において、本書はその目的に掲げる「多数の革新的なアプローチ」の提供に成功していると言える (Fujiki and Phillips 1)。本書の中心には、「日本映画」や「日本」の理解は「日本映画」という単独の映画作品や産業、また「日本」という単独の国や文化の中だけで成立するのではなく、「グローバル規模での歴史的・社会的・生態学的な文脈」と切り離せないという関心がある (Fujiki and Phillips 11)。そのような関心を軸に持つ本書は、日本映画をそれ以外の「ナショナル、トランスナショナル、グローバルシネマの研究調査とも折り重なるようなあり方」で捉え直し、各パートに配置された多角的な論文の主張を通じて日本映画研究だけでなく、日本映画 (産業) 史のアップデートを目指す (Fujiki and Phillips 12)。各パートで扱われるトピックが非常に細かく設定されているため、撮影所システム、作家主義、スターダムといった従来の日本映画研究でも頻出するトピックがどのような状態から理論の援用や新しい資料の発掘を通じて刷新される過程にあるのが分かりやすい。また、ポスト 3.11 の時空間 (DeNitto 2020) や沖縄と日本の政治的関係 (Dorman 2020) を問う論考は、*Journal of Japanese and Korean Cinema* でも類似テーマで特集が近年組まれたように、2010 年代以降の日本映画を検証するいくつかの動向に属するものだ。さらに、デュウによる日本のホームムービーに関する論考では、商業映画のアーカイブ事業からは見過ごされがちな市井の人々によるアマチュア映画がどのように特定の土地の記憶を想起させる重要な映像であるかが主張される。デュウの調査は 1990 年代から 2000 年代にかけて英語圏で発達したホームムービー研究を日本で制作されたホームムービーの理解へ援用したものである。2022 年に出版されたばかりの *Researching Historical Screen Audiences* でもホームムービー研究は大きく取り上げられており、その意味において、ホームムービーが持つ社会・歴史・文化・政治的意味はローカルだけでなく、グローバルな視野で語ることができるとわかるだろう。私が英語で書いた修士論文もデュウ論文で引用されており、英語でも日本の映像文化について論文を書き続けることの意義を痛感した。本書に関して一つの視点を追加できるとすれば、映画衣装を加えたい。「Film Style」には、撮影、演技、セットデザイン、音楽に関する論考が並ぶが、例えば辰巳知広による戦後日本映画産業と衣装に関する視点が加わった場合、どのようなハーモニーが生まれ得るだろうか。

ジョアン・ベルナルディと小川翔太が編集を務めた *Routledge Handbook of Japanese Cinema* は、「Decentering Classical Cinema: Modernity, Translation, and Mobilization」(6 本)、「Questions of Industry: Critical Studies of Regulatory Frameworks, Creative Labor, and Distributive Networks」(4 本)、「Intermedia as an Approach: Tracing Genealogies across Disciplines and Media」(6 本)、「The Object Life of Film: Site-Specific Approaches to Japanese Cinema Studies」(5 本) の 4 パート (合計 21 本) で構成されている。2010 年

代よりも前の日本映画研究の蓄積をさらに多面的に拡大させる試みは *The Japanese Cinema Book* と共通するものの、本書は時代・空間・上映／保存媒体・文化・文脈を越えて引き継がれていく、あるいは引き継がれることを失敗する映画フィルムの実質性により強い関心を有している。そのような関心は、『日本におけるフィルムアーカイブ活動史』で知られるフィルム・アーキビストの石原香絵(2021)、IMAGICA WEST で働く柴田幹太(2021)、そして神戸映画資料館およびおもちゃ映画ミュージアムの活動をそれぞれ読み解く小川(2021)とベルナルディ(2021)による論考に現れている。2022 年の大会では(デジタル)アーカイブの実践に関する発表は少なかったものの、Society for Cinema and Media Studies (SCMS) Conference でも映画の(デジタル)アーカイブは 2010 年代に入ってから常にホットトピックでもあった。Archives, Libraries, Museums and Special Collections: An International LGBTIQ+ Conference が 2006 年から行ってきたような性的マイノリティの記憶とアーカイブに関する視点が欠けている点は残念だが、本書がこれからの日本映画研究に提示する重要な意義の一つは、刻々と着実に変化していく映画技術や映画言説の発展の速さに取りこぼされてしまいそうな日本国内のアーカイブ実践を書き残すことに成功した点に見出せるだろう。

デイヴィッド・デサーがまとめた *A Companion to Japanese Cinema* は、「History, Ideology, Aesthetics」(11 本)、「The Old and the New」(10 本)、「Intermediality」(9 本)の 3 セクション(合計 30 本)から成り、ワイリー・ブラックウェルのナショナル・シネマに関するシリーズの一冊である。黒澤明の『羅生門』(1950 年)をめぐるエピソードから始まる本書は、*The Japanese Cinema Book* と *Routledge Handbook of Japanese Cinema* よりも単独の、これまで十分に英語圏で語られてこなかった映画作家に焦点を当てる論考が豊富にある。日本映画をめぐる近年の作家主義といえば、リンダ・エールヒの *The Films of Kore-eda Hirokazu: An Elemental Cinema* (2020) が例示するように是枝裕和が代表的な映画作家の一人になったが、本書は戦前から戦後以降に活躍した映画作家である内田吐夢 (Miyao 2022)、吉村公三郎 (Jacoby 2022)、川島雄三 (Jackson 2022)、羽二進 (Tsunoda 2022) を掘り起こす。また、東京 2020 オリンピック・パラリンピックの記録映画(『東京 2020 オリンピック SIDE: A』と『東京 2020 オリンピック SIDE: B』)の撮影状況をめぐるパワーハラスメントの問題が浮き彫りになってしまったものの、河瀬直美作品を多く検証してきたエリン・スクネベルドによる河瀬作品にみる喪失に関する論考は、女性の老いをめぐる映画的表象の分析としても興味深い。さらに本書では、ジェイ・マクロイが現代日本映画における若さについても書いており、日本映画におけるエイジング表象に対する研究動向において、ピーター・C・パグズリーが出版したばかり

の *Japanese High School Films: Iconography, Nostalgia, and Discipline* (2022) も併せて読むと良いだろう。本書には他にも女性のスターダム、女性映画論、映画とテレビ産業に関する刺激的な論考も含まれている。

各論集の所収論文に関する判断は読者に委ねるが、本稿を締める前に最後の点として、クィアな視点から捉えた日本映画研究について触れたい。それぞれの論集において、クィアな視点から日本映画を論じているものは、“Queer Resonance: The Stardom of Miwa Akihiro”(Kanno 2020)、“When Marnie Was There: Female Friendship Film and the Genealogy of Queer Girls’ Culture”(Kanno 2021)、“Silverscreen Dreamboats and the Polyvocal Address”(Jackson 2022)、“Queer Time in *Summer Vacation 1999*”(Cornyetz 2022)が挙げられる。各論集に少なくとも一本はクィアな視点を有する論考が含まれたことは、日本映画におけるクィアなものを探求する身としてはとても心強い。また、近年、英語圏では加藤健太が多数の論考 (2021a, 2021b, 2021c) を勢力的に出版しているし、国内でも徐玉 (2021) やアルノー・ストキンジェル (2020) が着実に成果を上げつつある。加えて、SCMS でも日本映画とクィアをめぐる発表は珍しくない。しかし、英語圏で日本映画をクィアな視点から論じるとき、スクーノヴァーとガルトの *Queer Cinema in the World* にも見られるように、それらの多くが松本俊夫の『薔薇の葬列』(1969 年) ばかりに着目する傾向にある。新型コロナウイルスの感染拡大により日本にリサーチへ来られていない研究者が多いという点も影響している可能性はあるが、一つにはクィアな視点から日本映画史をやり直す論考を英語で十分に国内から発信できていないからかもしれない。*The Oxford Handbook of Queer Cinema* (2021) に日本映画へ焦点を当てた章が見当たらない事実はまさにそうした状況を物語っているだろう。とはいえ、それは日本語で論文を書くことが英語で論文を書くことよりも劣るという意味ではない。まずは日本語で書き残すこと、それも英語圏における日本映画研究の発展に欠かせないものであったはずだ。

以上、近年の英語圏にみる日本映画研究の動向について論文集を中心にまとめてきた。英語圏の日本映画研究は、上記の論文集だけに凝縮されるものでは当然ない。*Journal of Japanese and Korean Cinema* や *Japanese Studies* などの学術雑誌などを見れば、さらに幅広いトピックを扱った論考に出会うことができるだろう。この「視点」の読者には読むことを楽しみ、書き続けてもらいたい。

## 参考文献

菅野優香「レビュー : *The Oxford Handbook of Japanese Cinema*」『映像学』、2017 年、106-110 頁。

徐玉「母性幻想とレズビアン感性——『挽歌』と『女であること』における久我美子」『映画研究』2021年、4-26頁。

ワダ・マルシアーノ、ミツヨ「特集 日本研究の道しるべ——必読の100冊：映画」『日本研究』57号、2018年、143-153頁。

Bernardi, Joanne. "New Paths Toward Preserving Japanese Cinema: the Toy Film Museum Backstory."

*Routledge Handbook of Japanese Cinema*, edited by Joanne Bernardi and Shota T. Ogawa. New York: Routledge, 2021, pp. 346-365.

Bernardi, Joanne and Shota T. Ogawa. *Routledge Handbook of Japanese Cinema*. New York: Routledge, 2021.

Coates, Jennifer and Eyal Ben-Ari, eds. *Japanese Visual Media: Politicizing the Screen*. New York: Routledge, 2021.

Cornyetz, Nina. "Queer Time in *Summer Vacation 1999*." *A Companion to Japanese Cinema*, edited by David Desser. Hoboken: Wiley Blackwell, 2022, pp.369-381.

Desser, David, ed. *A Companion to Japanese Cinema*. Hoboken: Wiley Blackwell, 2022.

Dew, Oliver. *Zainichi Cinema: Korean-in-Japan Film Culture*. New York: Palgrave Macmillan, 2016.

DiNitto, Rachel. "Toxic Interdependencies: 3/11 Cinema." *The Japanese Cinema Book*, edited by Hideaki Fujiki and Alastair Phillips. London and New York: Bloomsbury, 2020, pp. 379-393.

Dorman, Andrew. "Japan and Okinawa and the Politics of Exchange." *The Japanese Cinema Book*, edited by Hideaki Fujiki and Alastair Phillips. London and New York: Bloomsbury, 2020, pp. 530-540.

Egan, Kate et al. *Researching Historical Screen Audiences*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2022.

Ehrlich, Linda C. *The Films of Kore-eda Hirokazu: An Elemental Cinema*. Palgrave Macmillan, 2020.

Fujiki, Hideaki and Alastair Phillips, eds. *The Japanese Cinema Book*. London and New York: Bloomsbury, 2020.

Gregg, Ronald and Amy Villarejo, eds. *The Oxford Handbook of Queer Cinema*. New York: Oxford University Press, 2021.

- Ishihara, Kae. "A Historical Survey of Film Archiving in Japan." *Routledge Handbook of Japanese Cinema*, edited by Joanne Bernadi and Shota T. Ogawa. New York: Routledge, 2021, pp. 285-300.
- Jackson, Earl. "Silverscreen Dreamboats and the Polyvocal Address." *A Companion to Japanese Cinema*, edited by David Desser. Hoboken: Wiley Blackwell, 2022, pp.149-173.
- Jacoby, Alexander. "Yoshimura Kozaburo and the Working Woman in the Old Capital." *A Companion to Japanese Cinema*, edited by David Desser. Hoboken: Wiley Blackwell, 2022, pp.106-129.
- Kanno, Yuka. "Queer Resonance: The Stardom of Miwa Akihiro." *The Japanese Cinema Book*, edited by Hideaki Fujiki and Alastair Phillips. London and New York: Bloomsbury, 2020, pp. 179-191.
- . "When Marnie Was There: Female Friendship Film and the Genealogy of Queer Girls' Culture." *Routledge Handbook of Japanese Cinema*, edited by Joanne Bernadi and Shota T. Ogawa. New York: Routledge, 2021, pp.68-80.
- Kato, Kenta. "A Man to Remember: Two Film Adaptations of Kokoro." *Journal of Japanese and Korean Cinema*, vol.13(2), 2021a, pp.155-171. doi: 10.1080/17564905.2021.1969614
- . "A Man with Whom Men Fall in Love: Homosociality and Effeminophobia in the *Abashiri Bangai-chi* Series." *Japanese Studies*, vol.41(1), 2021b, pp. 59-71. doi: 10.1080/10371397.2020.1851178
- . "Kissing off the Defeat: Cross-Dressing as the Japanese Postwar Condition in *Oitsu Owaretsu*." *Journal of Homosexuality*, vol. 68(11), 2021c, pp.1860-1876. doi: 10.1080/00918369.2020.1712141
- Kubo, Yutaka. "Lingering Warmth of Touch: Male Intimacy in the Films of Kinoshita Keisuke." *Nang*, 7, 2019, pp. 41-46.
- Miyao, Daisuke. "The Adventure of Uchida Tomu." *A Companion to Japanese Cinema*, edited by David Desser. Hoboken: Wiley Blackwell, 2022, pp.90-105.



- Ogawa, Shota T. "Regional Film Archive in Transit: Yasui Yoshio and Kobe Planet Film Archive." *Routledge Handbook of Japanese Cinema*, edited by Joanne Bernadi and Shota T. Ogawa. New York: Routledge, 2021, pp. 331-345.
- O'Reilly, Sean D. *Re-Viewing the Past: The Uses of History in the Cinema of Imperial Japan*. New York: Bloomsbury USA Academic, 2018.
- Pugsley, Peter C. *Japanese High School Films: Iconography, Nostalgia and Discipline*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2022.
- Schoneveld, Erin. "Biographies of Loss: The Cinematic Melancholy of Kawase Naomi." *A Companion to Japanese Cinema*, edited by David Desser. Hoboken: Wiley Blackwell, 2022, pp.193-214.
- Schoonover, Karl and Rosalind Galt. *Queer Cinema in the World*. Durham and London: Duke University Press, 2016.
- Shibata, Kanta. "Japanese Film History and the Challenges of IMAGICA WEST Corp." *Routledge Handbook of Japanese Cinema*, edited by Joanne Bernadi and Shota T. Ogawa. New York: Routledge, 2021, pp. 301-313.
- Stockinger, Arnaud. "Can Film Be Gay?: Re-thinking "Gay" as a Film Genre in Japanese Context." *Intercultural Studies Review*, vol. 33, 2020, pp.114-134.
- Tara Brabazon. "Vlog 70 A Stropky Professor's Guide to Literature Reviews." *YouTube*. 25 July 2017. [https://www.youtube.com/watch?v=A69S\\_vzBgUc](https://www.youtube.com/watch?v=A69S_vzBgUc) (Last Accessed: 1 July 2022)
- Tsunoda, Takuya. "Hani Susumu, *Nouvelle Vague* in Japan and Processive Cinema." *A Companion to Japanese Cinema*, edited by David Desser. Hoboken: Wiley Blackwell, 2022, pp.612-638.
- Zahlten, Alexander. *The End of Japanese Cinema: Industrial Genres, National Times, and Media Ecologies*. Durham and London: Duke University Press, 2017.



## ● 書評

堀潤之・木原圭翔編『映画論の冒険者たち』東京大学出版会、2021年10月

井上 博之（東京大学大学院総合文化研究科准教授）



時代も国籍もさまざまな 21 人の映画論の探究者たちを登場させ、彼らの思考の見取り図を重要な論考のアンソロジーとは違ったかたちで提示する画期的な入門書である。まだ主要な著作が日本語で紹介されていない批評家・理論家が扱われている点も注目に値する。映画について本格的に考えてみたいと思ったとき、無数の作品と映画監督、映像分析のための用語や技術的な革新の歴史についての知識を身につけるだけでなく、しばしば難解に感じられる理論の数々を知る必要性を前にして途方に暮れてしまう学生や映画ファンも多いのではないだろうか。今後、『映画論の冒険者たち』はそのようなときに最初に参照できる本となるだろう。

「はじめに」の冒頭でも強調されているように、本書で取りあげられる論者には必ずしも映画理論の構築者であることを自任していたわけではない人々も含まれているが、いずれも映画批評、映画研究、哲学、あるいは作品制作の実践をとおして映画の本質について独自の思考を展開してきた人物である。各章は伝記的事実や時代背景についての簡潔な記述を織りこみつつ特定の論者の重要概念や方法論を紹介しており、本全体では 21 の章が 5 つの大きなカテゴリとゆるやかな時系列にそって並べられる。章末の文献案内では関連したほかの思想家・研究者の著作も紹介される。こうした配慮により、複数のコンテキストのなかでそれぞれの論者の思考の独自性と関連性を把握できるようになっている。また、構造主義、ポスト構造主義、精神分析、マルクス主義、フェミニズムなど、文学理論の概説書などでも採用されることの多い分類ではなく、あくまでも人物ごとの章に分けられている点も重要である。この構

成によって、それぞれの論者の思考の多面性やキャリアをとおしての変化の様子を捉えることが可能になるからだ。英語圏で比較的最近に出版され、本書と似た構成を持つ映画理論の概説書としてマリー・ポメランスと R・バートン・パーマーが編集した『闇のなかの思考——映画・理論・実践』（*Thinking in the Dark: Cinema, Theory, Practice*, Rutgers UP, 2016）がある。同じく 21 人の論者が扱われており、そのうち約半数は共通している。2 冊をあわせて読めばさらに理解も深まるだろうし、扱われる論者や強調される側面の違いを考えてみるのも有益だろう。

第 I 部「古典的映画論のアクチュアリティ」ではまだ登場したばかりの若いメディア・芸術形態としての映画に固有の表現技法の問題、あるいは映画が人間の知覚や認識にもたらしうる変容といった問題を考察した 5 人が取りあげられる。心理学から映画に接近したヒューゴー・ミュンスターバーグは観客の注意の操作と映画における演出の関係性に先駆的に反応した論者として紹介され、ベラ・バラージュについての議論ではその思考が抱える政治的なあやうさに注意を促しつつ、カメラがもたらす世界を発見する喜びと映画の本質を捉えようとする醒めた批判的意識の共存が強調される。ジャン・エブシュタインからはものが感情と化すアニミズム的な世界認識とレンズという人間の眼とは異なる機械の眼によって人間主体を脱中心化する思考が引き出され、モンタージュ論をはじめとする映像の言語性をめぐる思考が注目されがちなセルゲイ・エイゼンシュテインについての章では身体性を中心に据えて彼の映画論が再編成される。そして日本では『カリガリからヒトラーへ』の著者としておもに知られてきたジークフリート・クラカウアーについては、表現主義とはある意味で対極にあるリアリズムの擁護者としての側面が強調される。いずれの章でも映画が模索を繰り返しながら表現の幅を広げていく時代に、その新しさを驚きをもって思考した論者たちの思索がいきいきと捉えられている。

これ以降の章でも執筆者独自の切り口から映画論者のキャリアを見渡し、その映画観の特徴を的確につかみだし、思考の変遷と独創性、現代性を魅力的に紹介する論考が続く。すべての章にくわしく言及できないのが大変残念であり、ある程度リストのようになってしまうのだが、駆け足で概観しておく。第 II 部「映画批評の実践」には、しばしば価値判断をとまなう批評の営みのなかで個別の作品と向きあいつつ独自の映画論を発展させた 5 人の批評家が登場する。現実の曖昧性とそれを捉える映画の雑種的な性質を擁護したアンドレ・バザン、存在の美を示す映画の特性を追求したエリック・ロメール、映画とテレビをめぐってイメージの本質に思考をめぐらせたセルジュ・ダナー、スクリーンにあらわれる細部の精読によるスタイル分析を重視した V・F・パーキンズ、強く歴史性と政治性を抱えた批評実践のなかで独創的な理論家となった蓮實重彦の 5 人である。映画についての批評と研究はつねに相互に刺激を与えあいながら展開してきたといえるが、第 III 部「現代映画理論の展開」と第 IV 部「フィルム・スタディーズの冒険」はより学術的な場所での映画論の展開を追うものである。記号学および精神分析学の知見を援用した体系的思考で知られ、同時に体系性から逸脱

するものへの一貫した関心を持ち続けたクリスチャン・メッツ、映画についてもビデオ・アートをはじめとする映像アートについても精読を土台に領域横断的な思索をめぐらせるレイモン・ベール、主流映画の様式と物語が反映・再生産してきたジェンダーの非対称性をあぶりだし、のちにはデジタル技術がもたらす観客性の変容をめぐる考察を展開するローラ・マルヴィがまず重要な理論家として登場する。第Ⅳ部ではおもに北米の大学で活躍するフィルム・スタディーズの研究者たち、「古典的ハリウッド映画」の形式研究や認知主義的な受容研究などによって研究の枠組みの刷新者として大きな存在感を放ってきたデイヴィッド・ボードウェル、映画鑑賞の経験を軸にモダニティの主題に向きあい続けた知の越境者ミアム・ハンセン、ポルノグラフィやメロドラマにおける観客の身体性をめぐってジェンダー・セクシュアリティ・人種を軸とした政治的・理論的探究を続けるリンダ・ウィリアムズ、初期映画研究の牽引者であり、ハンセンと同じく広い視野をもってモダニティを分析する映画史家トム・ガニングの4人が扱われる。とりわけ20世紀後半以降、映画は個性的な哲学者たちの思考を促し、その哲学的思考がさらに映画批評・研究に大いに刺激を与えてきた。最後の第Ⅴ部「哲学者たちの映画論」はそうした領域横断的な探究者4人を扱う。技法やジャンルなど、創造のための出発点となる力として捉えられる「メEDIUM」が持つ可能性のあらわれを個別の作品批評から引きだすスタンリー・カヴェル、マルクス主義理論家の立場から映画を含む多様な文化現象を分析するフレドリック・ジェイムソン、『シネマ』2巻においてすぐれた映画作家たちの創造をめぐる独創的な理論を展開したジル・ドゥルーズ、独自の映画芸術観からモダニティや表象不可能性といった概念をめぐる従来の議論に異論をとこなえるジャック・ランシエールである。いずれの章も彼らのときに難解な著作に分け入っていくための心づよい案内役となるものだ。

かぎられた紙面のなかでこれらの多彩な映画論者の思考のエッセンスを伝えるため、各章の執筆者は独自の視点から重要な概念やキーワードをしばりこんでおり、その結果、紹介される論者の特徴が際立ってくる。それぞれの映画論の重要性だけでなく限界点に触れる記述も見られ、概説書には欠かせないバランス感覚も忘れられていない。クラカウアーを論じる章などにあるような、特定の理論家の日本と海外における受容の違いについての解説も大変参考になるものである。また、いずれの章も複数のコンテキストのなかでそれぞれの思考を位置づけつつ、各理論が抱える現代性、持続するアクチュアリティに強く意識的である。こうした本書の姿勢はミュンスターバーグの映画論を近年の認知主義的映画研究と接続する最初の章からすでに明らかであり、過去に提唱された理論が決して過去だけのものにとどまらない様子を示してくれる。ここから立ち現れるのは堅固に築かれた不変の思考の体系というよりも、時代とともに変化しながら生き続けるダイナミックな映画理論の姿である。ひとりひとりに固有の映画体験をもとにして、ここで紹介される理論と対話しつつ各自の映画観を発展させるように、と読者を触発してくれるのが本書である。

充実した概説書であるこの書物にさらに求めたい事項があるとしたら、それは可能なかぎり簡潔に多様な理論を紹介する本書最大の長所と表裏一体のものにほかならない。登場する 21 人のほかにも紹介してほしいと感じる映画論者がいないわけではない。独自の文学研究者・映画批評家である D・A・ミラー、映画に関する著作が未邦訳の哲学者ロバート・B・ピピンの名が浮かんだが、こうしたものねだりのリストは当然読み手次第でいくらでも変化し、長くなるだろう。また、凝縮された密度の濃い記述のために論じられる人物とその思考について読者がすでに一定の知識を持っていることを前提としているように感じられる章もあった。そして、具体的な分析例が出てくる章もあるものの、理論的思考が個々の作品の鑑賞体験とどのように接続しうるかを示すため、執筆者に各章で紹介される理論・思想を使った一定の長さの作品分析を実演して見せてほしいという思いもある。理論的な知識を身につけても、実際の作品分析の際にせっかく学んだ理論とうまく対話できないという経験はそれほどめずらしくないのではないかと考えられるからだ。

しかし、こうした要素をすべて取り入れれば本書は現在の長所を失い、別の本になってしまっただろう。ひとつひとつの映画との出会いを大切にしつつ、このメディアの本質について思考をめぐらせてみたい読者にとって——バザンを論じた章のことばを借りるならば「映画の実存、現実のありようから出発して、「映画とは何か」と問い続け」たい探究者にとって（74）——本書は思考の冒険に出発するための有益なガイドブックとなるはずである。

## ●新入会員自己紹介

### 日本映画における中国人の表象とステレオタイプ / 北海道のフィルムツーリズム研究

崔 鵬（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士後期課程）

日本映画学会の皆様、初めまして、北海道大学の博士崔鵬（サイホウ）と申します。この度は入会をお認めいただき、本当にありがとうございます。よろしく願い申し上げます。

私は中国伝媒大学の映画プロデューサー専攻で映像の撮影や編集技術を学び、中国のテレビ局でインターンシップの経験を得ました。その後、米国の Academy of Art University を経て、監督、脚本、編集の勉強に励み、短編映画の現場で監督、助監督とプロデューサーとして活躍していた上で、MFA 修士号を取得して、日本に来ました。米国の 5 年と日本の 9 年で約 14 年の海外生活と映画の現場を経験して、研究と映像製作の狭間で過ごしてきた札幌で、映像・映画に関する理論知識を高めるために、北海道大学でダブルマスターの修士号を取得し、現在は博士課程在学中です。

修士課程に在学していたときのテーマは「90 年代以降の在日中華系を描く映画における人物の表象」であり、研究対象となる映画はフィクション映画『スワロウテイル』、『BAD FILM』、『不夜城』、『新宿インシデント』、『東京に来たばかり』とドキュメンタリー映画『我々の日本での留学時代』、『泣きながら生きて』でした。四方田犬彦（2014）によれば、1990 年代から、日本の経済にとって、不景気が長く続くと共に、在日外国人が不法滞在者を含めて急増したので、こうした社会の動向は、確実にこの時期の日本映画にも影響を与えたといえます<sup>1</sup>。それゆえ、この時期から一部の映画は、在日中華系を主役にして、その物語を真剣に描き始めました。例えば、映画監督岩井俊二や園子温監督などは、それぞれ在日中華系を表象する映画『スワロウテイル』と『BAD FILM』を制作しました。またドキュメンタリー映画の監督張麗玲、任書剣などは、この時代の風向きを把握し、独創性の視点から、在日中華系の流入及び滞在の実態を意識したり、観察したりしながら、在日中華系の物語を撮り始め、『我々の日本での留学時代』、『泣きながら生きて』、『たんぽぽの歳月』などの映画が相次いで誕生しました。

彼らは、フィクション映画とドキュメンタリー映画の力で、世の人に在日中華系の様々な表象を伝えました。また、2010 年に、在日中華系の李瓔監督は、在日華僑の老人をテーマとして、彼の人生の物語をドキュメンタリー映画化して、『2 H』を制作しました。

フィクション映画において虚構される在日中華系の表象を主に分析しながらも、その表象の裏に凝縮される在日中華系の実在する表象は何かも考察します。また、ドキュメンタリー映画において、在日中華系の実像はどのように映し出されるかを分析しながらも、フィクション映画において虚構される在日中華系の表象とのつながりも明らかにすることを試みました。



要約するならば、これまでのフィクション映画とドキュメンタリー映画を通覧し、個々の作品で虚像化されまた実像化される在日中華系を考察しました。90年代を背景としたフィクション映画は、在日中華系を侵入性と他者性において表現しています。言わば、在日中華系は日本にいる「犯罪者」及び「周縁化される他者」のように描かれ始めました。これに対して、在日中華系の様々なポジティブな表象は、「勤勉」、「奮闘」、「人情」のように副次的に表現されても、それは在日中華系を犯罪化される表象の淵から救出することができません。映画における中華系は日本に来た後、生きるため、犯罪に手を染める犯罪者であるという虚構された表象が、90年代を時代背景とする映画に常に表現されています。そこでは「マフィア（上海マフィア）」、「チンピラ」、「詐欺者と窃盗犯」などのイメージが順次描かれています。また、差別を受ける「周縁化される他者」というステレオタイプは、「違法滞在者」、「第三文化の子供」という表現で細分化されました。さらに、「日本語が下手」という描写は、在日中華系の共通点のように提示されていました。

続いて、21世紀を背景とした在日中華系をテーマとした映画において、在日中華系の映画表象を変容しつつあることがわかります。「日本語が下手」という描写が依然として見られる一方、この時代の映画は、『東京に来たばかり』における吉流のような留学生という描写において、犯罪者化の表象を徐々に離れていきます。もっともたとえ90年代の侵入性に満ちた「犯罪者」の表象が見られなくても、日本にいる「他者」及び「周縁化される他者」のように描かれています。ただ、00年代の「他者」は90年代の侵入性に満ちた「他者」の描写と比べると、全く日本の社会にとって無害な存在となり、日本社会の内部にも融合可能のように描かれています。かつての違法滞在者や、ネガティブな「侵入者」や「犯罪者」などから、徐々に留学生としてのポジティブな「奮闘者」や国籍を強調せずに日本にいる「普通の人間」の方向に進化しています。その理由は監督たちが、現実の在日中華系の社会における90年代から00年代までの発展と進歩を参照して、映画の物語を作る時の土台にしたからと考えられます。

札幌で様々な映画産業に関わるイベントやフィルムコミッションで行われたワークショップに積極的に参加し、北海道の地方都市の振興に映画産業の力を借りるような提案プロジェクトに関わった経験により、博士課程では研究テーマを映画による地域振興とフィルムツーリズムの方向に変更しました。北海道の地域過疎化と人口減少の状況下で、北海道を舞台としての映画を分析しながら、映画の上映はどのように街おこしを実現させるのか、そして北海道のフィルムコミッションはどのような役割を果たしているのか。フィルムツーリズムというアプローチを用いて映画産業と観光産業の間に橋をかけ、地域の活性化を図るフィルムコミッションに注目し、メディアと情報社会において、観光と地域振興や、映画によるまちづくりなどのあり様と今後の行方を考察しようと思っています。

上記の点について、先月実施した「フィルムツーリズムへの社会的受容性」のアンケート調査から得られた220人の回答データをもとにして考察していく予定です。さらには北海道で活躍している映画産業の従事者、フィルムコミッションの職員、観光統計の専門家

からのインタビューと聞き取り調査をデータ化する手法を用いようと考えています。今後は査読論文と博士論文を執筆する上で、日本映画学会の大会に積極的に参加し、学会誌に投稿しようと思います。

皆様から映画表現論研究や専門としての映画産業論などのご指導を頂ければ幸いです。

## 註

- 1 四方田犬彦（2014）『日本映画史 110 年』集英社、222 頁。



## ● 出版紹介

- 堀潤之会員（編著）／角井誠会員（編著）／須藤健太郎会員（共著）／木下千花会員（共著）『アンドレ・バザン研究』第6号、アンドレ・バザン研究会、2022年3月。
- 久保豊会員（単著）『夕焼雲の彼方に——木下恵介とクイアな感性』、ナカニシヤ出版、2022年3月。

※出版情報に関しまして

書評対象となる書籍につきましては、ご惠贈いただければ幸いに存じます。（書評対象の選定に関しましては「日本映画学会報執筆規定」をご参照ください）。また、書評対象ではない書籍の出版に関しましては事務局に情報をいただければ会報にて紹介いたします。

## ● 新入会員紹介

- 崔 鵬（北海道大学大学院博士後期課程）、メディア文化論／映像表現論
- 渡辺 裕貴（東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士課程）、19世紀アメリカ文学・文化
- 松井 夢未（公立小松大学国際文化交流学部）、映画技法論
- 角井 誠（東京都立大学人文社会学部准教授）、フランス映画史・映画理論
- 加藤 健太（早稲田大学国際コミュニケーション研究科博士後期課程）、日本映画と男性性
- 潘 雷（関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科博士後期課程）、映画学／ハリウッド映画論
- 森本 光（ケント大学大学院修士課程）、アメリカ映画と文学